

福祉・防災コミュニティづくりの試み ～住民のアイデアを生かしたジオラマづくり～

佐藤和彦

大正大学 地域構想研究所 研究員

(要旨) 筆者は、大正大学と東京都豊島区による個別避難計画作成に関する共同研究に参画している。

令和7年度には、町会・自治会に対して個別避難計画の作成への協力を呼びかけるとともに、区内で唯一洪水リスクを有する高田地区において福祉・防災コミュニティづくりを目指した取り組みを推進した。

本稿では福祉・防災コミュニティづくりに向けて住民のアイデアを生かして共に企画してきた、ジオラマづくりを起点とした連続企画について報告する。

キーワード：ジオラマ、福祉防災、コミュニティ、個別避難計画

1. はじめに

筆者は、令和5年度から東京都豊島区と避難行動要支援者（以下、「要支援者」という。）の個別避難計画作成を促進する共同研究に取り組んできた。

共同研究は、①様々な主体による個別避難計画作成の促進、②個別避難計画の有効性を高める地域コミュニティづくり、の2本柱で進めてきている。

1つ目の、様々な主体による個別避難計画作成については、要支援者本人・家族による作成が先行して進んできた。

豊島区は令和6年度に要支援者本人・家族による個別避難計画作成を呼びかけ、5,000名弱の要支援者のうち700名ほどが作成を終えている。令和7年度には、他の主体への協力の呼びかけを開始した。介護事業者による個別避難計画作成に向けた協定締結の準備が進められているほか、町会・自治会向けには令和7年8月から9月にかけて3回の説明会を開催した。説明会では、筆者ら研究者と共に個別避難計画作成に取り組むモデル町会の募集を行ったが、残念ながら、現時点ではモデル町会への応募はゼロとなっている。具体的な活動イメージがつかめる資料を作成したうえで、改めてモデル町会を募集していくこととしている。

2つ目の地域コミュニティづくりについては、豊島区内で唯一神田川の洪水リスクを抱えている高田地区で福祉・防災コミュニティづくりに向けた取り組みを進めてきた。

令和5年度、6年度には大正大学主催の防災講座やワークショップを開催し、災害時に誰も取り残さないためには、地域の災害リスクへの正しい理解と福祉・防災の視点を盛り込んだコミュニティづくりが重要であることを繰り返し訴えてきた。

本稿では、こうした経過を踏まえながら、令和7年度の福祉・防災コミュニティづくりとして、住民と共に企画した、高田地区のジオラマ作成を起点とした連続企画について紹介する。

なお、本稿は、2025年12月の地域構想研究所の研究レポート¹に加筆修正したものである。

¹ 「住民のアイデアを生かした段ボールジオラマづくり」(https://chikouken.org/report/report_cat05/17773/)

2. 住民目線での企画を実現するまでの経過

(1) ファシリテーターの誕生

令和7年度の取り組みを紹介するにあたって、最初に筆者と共に活動してくれている住民の皆さんを紹介しておきたい。まずはファシリテーターを紹介させていただく。

少しさかのぼるが、筆者は令和5年度の高田地区での最終イベントに班別討議を取り入れたいと考えていた。本学で共同研究に参画している研究者3名では人手が不足するため、窮余の一策で過去のイベント参加者に対して運営に協力してくれるファシリテーターの募集をかけたところ、思いがけず4名が手を挙げてくれた。4名は、福祉関係、建築関係、気象関係（マンション管理組合役員）、中小企業診断士と多分野にわたって活躍している経験豊富な人材であり、打ち合わせ段階から積極的に関与してくれて、筆者にとって大変心強い存在となった。

4名の活躍のおかげで、ワークショップの班別討議は大変スムーズに進行され、充実したものとなった。ありがたいことにこのファシリテーター達は、引き続いて令和6年度以降のイベントにも協力してくれている。

(2) 企画協力者達の誕生

令和6年度には、高田地区で4回のイベントを開催した。座学の防災講座のほかに、自主防災組織が個別避難計画作成に取り組んでいる神奈川県藤沢市（辻堂地区）への視察・交流会なども開催した。

それぞれの取り組みは、参加者の満足度も高く充実したものであった。しかしながら、参加者個人はコミュニティの重要性や個別避難計画について理解を深めたものの、地域住民による自発的な個別避難計画作成といった具体的な動きにつながることはなかった。

筆者は、その原因の一つに大学の研究者が一方通行で企画していることがあるのではないかと考えた。そこで、令和7年度から一緒に福祉・防災の企画を考えてくれる企画協力者を募集した。幸いにも住民3名が手を挙げてくれた。

また、令和6年度の最終企画「神田川防災まち歩き」には豊島区民社会福祉協議会のCSW（コミュニティ・ソーシャル・ワーカー）が参加していた。CSWは、福祉の視点から地域コミュニティ構築を目指して区民ミーティングを開催しており、令和7年度にはその一つとして防災まち歩きを実施する意向であることが判明した。福祉と防災は、どちらもコミュニティが重要になるという点が共通しており親和性が高いことから、可能な範囲でCSWの防災まち歩きと連携していくこととなった。

こうして、ファシリテーター、企画協力者に加えて令和7年度にはCSWと連携しながら企画を検討する体制を構築することができた。

3. 段ボールジオラマが実現するまで

高田地区の企画会議は、「楽しく、ちょっとまじめな福祉・防災」というコンセプトを掲げ、令和7年5月にZoomによるオンライン方式で開催した。

各自から意見を求めたところ、企画協力者の1名から段ボールジオラマを作って小学生の防災授業をする予定だという報告がなされた。段ボールジオラマとは、段ボールに地図を貼り付け、等高線に沿って切り出して重ね合わせた立体地図のことであり、地域の高低差がよくわかる模型である。豊島区内で最大級の高低差がある高田地区にはうってつけのアイデアであった。

また、CSWからは秋に防災まち歩きを実施したいという発言があり、夏から秋にかけて段ボールジオラマを作成し、防災まち歩きにつなげていくという、連続企画の骨格が定まった。

次に筆者は、豊島区のコミュニティ施設である「地域区民ひろば」に協力を呼びかけた。区役所の地域区民ひろば課の了解を得たうえで、段ボールジオラマの作成や防災講座などを行う活動拠点として、高田地区にある「地域区民ひろば高南」の運営協議会に協力を要請した。なお、地域住民である運営協議会の皆さんには、段ボールジオラマづくりワークショップへの参加も呼びかけた。

こうして、会場確保のめどが立ったところで、ジオラマの試作に取り掛かることとした。試作には、企画会議のメンバーに加えて、興味を示した地域区民ひろば課の職員にも参加してもらったのだが、工作好きの彼女はとても心強い仲間となった。

ジオラマづくりは筆者も初体験であったため、素材の決定から工作の手順まで手探りで進めた。既に段ボールジオラマ作成に着手している企画協力者からは、段ボールは比較的簡単に入手できるが、大きさや厚みが揃わないし、切り出しが大変で作業しにくい、という指摘がなされた。そこで筆者が目をつけたのは、のり付きのスチレンボードである。個人的に試作してみたところ、扱いやすく非常に便利な素材であった。ただし、厚みが増すと切り出し作業には思いがけないほど力が必要なこともわかった。

そこで、厚さ3ミリ、5ミリ、7ミリのスチレンボードを揃えて、企画協力者とともに複数回の試作を行った。最終的には作業性を考慮して、3ミリ厚のスチレンボードに決定した。なお、この厚みでも地図の水平方向の縮尺と比べて高低差の縮尺が強調されてしまうのだが、地形の特徴を把握する教材づくりであると割り切って、高低差の正確さにはこだわらないこととした。

試作を通じて、切り出し作業で腕の負担を減らすためには小刻みに切れ目を入れた方がよいことなど、参加者一同で手を動かしながら一緒にノウハウを習得していった。

何よりも痛感したことは、切れ味のいいデザインナイフの重要性だった。試作段階では、いわゆる100円ショップで入手したナイフを使っていたが大変不評で、企画協力者からもきちんとした工作用のナイフの購入を強く求められた。

地図の準備が進むにつれ、段ボールジオラマづくりには最大12層分の地図が必要なことがわかった。試作段階では1層あたり1時間程度の作業時間を要していたことから、全体の作成には相当な時間がかかることが予想された。2時間半のワークショップで完成しなかった場合には、他日に区民ひろばに通って残りの作業をこなすことを覚悟した。

他方、防災まち歩きを主催するCSWは、6月から実行委員会を組織して検討を開始した。実行委員会の構成員は、地域の民生・児童委員、福祉施設の職員、学習院大学の教授などであり、筆者もオブザーバー参加させていただいた。この実行委員会では、防災まち歩きについての勉強会、まち歩きのコースの検討、下見などを行った。参加者どうしで地域の福祉・防災に関する見どころを挙げながら道順を決めていき、雑司ヶ谷霊園コース、鬼子母神コース、高田・神田川コースの3コースが選定された。

このうち高田・神田川コースは、段ボールジオラマの対象エリアを歩くコースである。高田地区は1丁目から3丁目までであるが、神田川の水害対策でビルや住宅に止水板などが設置されている高田3丁目が選定された。段ボールジオラマは、ひとまず高田3丁目を完成させることを目標とした。

まち歩き実行委員会のメンバーは、段ボールジオラマづくりやジオラマを使った防災講座にも参加してくれ、筆者は地域住民とのつながりを深めていくことができた。

4. 「段ボールジオラマづくり」から「防災まち歩き」まで

5月から始まった企画会議、6月から始まった防災まち歩き実行委員会、そして地域区民ひろば高南との協議などを経て組み上がった令和7年度の福祉・防災まちづくりに向けた企画は、以下に示すとおり3段構えの連続企画となった。

①「段ボールジオラマづくりワークショップ」(大正大学主催)	10月25日(土) 14:00～16:30	区民ひろば高南第一
②「段ボールジオラマを使った防災ワークショップ」(大正大学主催)	11月8日(土) 14:00～16:00	区民ひろば高南第一
③「防災まち歩き」 (CSW主催の連携企画)	11月22日(土) 14:00～16:00	雑司が谷公園丘の上のテラスほか

(1) 段ボールジオラマづくりワークショップ

企画第1弾の段ボールジオラマづくりワークショップには、一般参加のほかに区民ひろば高南の運営協議会、防災まち歩き実行委員会なども含めて13名が参加してくれた。

試作の教訓を生かして、当日までに工作用の切れ味の良いナイフを購入しておいた。

参加者は2つのテーブルに分かれて、神田川の右岸側と左岸側の切り出し作業に取り組んだ。今回の目標は、CSW主催の防災まち歩きをする高田3丁目のジオラマの完成。中には、マイナイフを持参した参加者もいて、みな童心に帰ったように楽しげに作業をしてくれた。参加者の様子を眺めながら、筆者は座学や討議とは異なる工作ワークショップの魅力をしみじみと感じていた。

驚いたのは、作業効率の良さである。試作の際には、1段切り抜くのに小1時間を要しており、2時間半という短時間では作業は終わらないだろうと想定していた。あにはからんや、なんと1時間半ほどで切り抜きから組立まで終了してしまった。参加者の思い切りの良いナイフさばきと技術の高さには、あきれ返るばかりであった。

なお、この回の申込受付や会場設営は、ほぼ全面的に区民ひろば高南のスタッフに依存することとなった。筆者は、直前の23日まで台風被害にあった八丈町に派遣されており、直前の準備はほぼ丸投げせざるを得なかった。所長はじめスタッフの皆さんには、心から感謝している。



図-1 写真①ジオラマづくりの様子
(2025年10月25日筆者撮影)



図-2 写真②完成したジオラマ
(2025年11月8日筆者撮影)

(2) 段ボールジオラマを使った防災ワークショップ

企画第2弾として、11月8日に段ボールジオラマを活用した防災ワークショップを行った。

ワークショップの前半では、筆者が高田地区での災害リスクについて説明した。

発生がひっ迫している首都直下地震や近年注目されている富士山噴火の脅威に加えて、高田地区の特徴的な災害リスクである風水害について重点的に解説した。水害対策の効果により、近年は豊島区内では洪水が発生していないが、1,000年に一度の大雨が降れば神田川で洪水が発生するリスクがあ

る。この点について、豊島区の洪水・浸水ハザードマップや東京都が公開しているシステム²を活用して、複数地点の浸水予想シミュレーション映像を見てもらいながら、なるべくリアルに伝えられるよう工夫した。あわせて、高台避難の難しさを抱える高田地区での個別避難計画作成の必要性を訴えた。

そのうえで、ワークショップの後半では、参加者全員で会場中央に設置した段ボールジオラマを用いて、防災まち歩きの高田・神田川コースをなぞりながら、地形の特徴やコース上のポイントを確認した。高田3丁目には災害リスクがある一方で、災害時に役立つ福祉施設、医療施設、防災施設などがあることを、ジオラマにピンを打ちながら確認していった。

参加者は、「学習院側はこんなに高くなっているのか」「神田川周辺の低さがよくわかる」などと地形を目のあたりにして興味を深めている様子だった。中には「せっかくジオラマができたから、水に沈めて浸水の様子を確かめてみたい」という声も上がり、筆者が予想もしなかったジオラマの活用策が提案された。



図-3 写真③ジオラマでのコース確認
(2025年10月25日筆者撮影)

(3) 防災まち歩き(高田・神田川コース)

11月22日。いよいよ、第3弾となる防災まち歩きの当日を迎えた。

第1弾、第2弾の企画参加者は(筆者を含めて)この日を心待ちにしていた。参加者の日ごろの心掛けが良いためか、穏やかな晴天となり格好のまち歩き日和であった。

防災まち歩き3コース(雑司ヶ谷霊園コース、鬼子母神コース、高田・神田川コース)の全体的な拠点は、雑司が谷公園の丘の上テラスであるが、やや離れている高田・神田川コースの参加者だけは高田3丁目の特別養護老人ホーム「山吹の里」に集合した。

スタート地点となる「山吹の里」は、豊島区の福祉救援センター(福祉避難所)に指定されている高齢者福祉施設である。ここでは、施設職員の方から「この施設は災害時に高齢者の二次避難所となる施設であって一般住民の避難所ではない」という大切な説明をしていただいた。参加者からは「それは知らなかった。勉強になる。」という声が上がっていた。

防災まち歩き当日は、高田・雑司が谷コースの参加者をAチームとBチームの2チームに分けて同じコースを反対周りに歩いたのだが、最初のポイントだけは2チーム合同で視察した。中学校の敷地に立ち入らせていただくことになっており、学校側への配慮や説明者の確保などの点を考慮した結果である。ここでは、防災危機管理課の協力により、備蓄倉庫や災害用マンホールトイレを視察することができた。備蓄倉庫の中に入る機会はあまり多くないため、この視察ポイントは好評であった。また、外国からの留学生からは「こうした備蓄があると安心感が高まる」という感想も聞かれた。

² 東京都水害リスク情報システム 浸水実績図(<https://www.suigai-risk.metro.tokyo.lg.jp/shinsui/jisseki/main.html>)

その後筆者は、反時計回りのAコースで実行委員会メンバーとともに案内役を務めた。ジオラマで確認した大きな高低差などを目の当たりに体感してもらいながら、コース上の消火器、消火栓、東京都指定の避難場所標識などを見かける都度、説明しながらコースを歩いて行った。このコースの重要な見どころは、備蓄倉庫のほかに緊急医療救護所とビルの止水板など神田川の洪水対策の様子である。

豊島区で災害医療の中心となるのは傷病者のトリアージ³を行う「緊急医療救護所」である。高田・神田川コースの中では、救急病院に隣接する公園に緊急医療救護所を開設するための資機材を保管している。その倉庫を見ながら、災害時には医師会所属のクリニックは休診になり医師や看護師は緊急医療救護所に集まること、傷病者は緊急医療救護所に搬送されることを説明すると、参加者からは大きなよめきがあがり「災害医療体制は知らなかった。参加してよかった。」という声が聞かれた。

次いで、神田川に近づくにつれ、複数のビルやマンションなどに止水板が設置されている様子、ベランダの開口部を塞いで浸水対策を施している様子などを見ることができた。参加者からは「普段は何気なく歩いているが、浸水対策には気づかなかった。」などの声が聞かれた。さらに地元の町会長が飛び入り参加して「この辺りは、神田川があふれて腰の上まで水浸しになったことがある。」などの体験談を話してくださった。参加者は、町会長の説明に熱心に聞き入り、神田川の洪水の恐ろしさを実感していた様子であった。

最後に、神田川にかかる高戸橋で洪水対策の分水路の合流地点を確認し、近年数を減らしている公衆電話（災害時にも通話可能）を確認して、まち歩きは終了となった。その後、都電荒川線を利用してゴールの丘の上のテラスを目指した。

丘の上テラスで行われた全体の振り返りの場には3コース6チームの40名を超える参加者が一堂に会しており、大盛況であった。幸いにもけが人や具合が悪くなる人はおらず、みんな元気にゴールまでたどり着いていた。会場内は、若い親子や外国人留学生などを含め、年齢層や性別など多様な参加者でごった返していた。CSWの集客力の高さには大いに感心させられた。

筆者が何よりもうれしかったのは、段ボールジオラマづくりから防災まち歩きまで体験した複数の参加者から「高田1・2丁目でも防災まち歩きをやりたい」といった声を聞くことができたことである。

5. ジオラマづくりのこれから

令和7年度に実施したジオラマづくりから防災まち歩きに至る一連の連続企画は、ファシリテーター、企画協力者、区民ひろば高南、CSW、防災まち歩き実行委員会の皆さんと一緒に作り上げてきた。

昨年度までの、大学側で準備した一方通行の企画に比べると、準備段階から参加してくれた住民の皆さんの満足度は相当に高まった。「次は自分のまち（高田1・2丁目）でやりたい」という声が上がったことは、これまでにない手ごたえを感じさせてくれた。

工作ワークショップであるジオラマづくりは、参加者が手を動かし、協力しながら、目に見える形で模型が出来上がっていく。福祉・防災・コミュニティづくりといった、少々堅苦しいテーマを取り扱いながらも、作る喜びを感じることができる楽しいワークショップである。

そして、組み上がったジオラマは、高田の地形を手取るように見て取ることができ、防災まち歩きに向けたよい教材となった。

³ 災害時発生現場等において多数の傷病者が同時に発生した場合、傷病者の緊急度や重症度に応じて適切な処置や搬送をおこなうために傷病者の治療優先順位を決定すること(日本救急医学会HP)

筆者にとっては、CSWによる防災まち歩き実行委員会が重要な学びの機会となった。参加者が自ら地域の見どころを挙げながらコースを設計し、実地に下見をして仕上げていく過程を通じて、地域への理解を深め、チームワークが深まっていった。この実行委員会方式は、地域のコミュニティづくりにも生かしていけると考えている。

さて、せっかく生み出された一連の動きを、単発で終わらせてしまっはなんとも勿体ない。

筆者は、高田1・2丁目での防災まち歩きを希望する声に励まされて、3月に高田1・2丁目のジオラマ作成ワークショップを企画している。

この企画には、神田川周辺の町会・自治会にも参画を呼び掛けていくつもりである。これまでは関心を持ってくれた個人とのつながりを中心に取り組みを進めてきた。だが、実は防災まち歩きの振り返りの中で町会・自治会の巻き込みができていないという鋭い指摘を受けているのである。筆者自身も地域の福祉・防災を担う中核的な存在である町会・自治会との連携を深めることが、今後の福祉・防災コミュニティの形成に不可欠なことはわかっていたのだが、どのように巻き込んでいけばよいのか道筋が見えていなかった。

その点で、CSWの防災まち歩き実行委員会は大きなヒントを与えてくれた。次のジオラマづくりワークショップでは、ジオラマづくりを起点として町会・自治会にも参画してもらおう防災まち歩き実行委員会を立ち上げていくつもりである。

令和7年度の取り組みでは、地域住民と共に企画を作り上げていくことが、参加者の主体性やチームワークを高めるという手ごたえを得ることができた。

今後は、企画を作り上げるだけでなく、地域の福祉・防災について町会・自治会を巻き込みながら住民と共に考え、行動することを通じてコミュニティ力の向上につなげていきたい。

その先に、豊島区内で唯一の洪水リスクを抱える高田地区での個別避難計画作成のモデル事業を展開する手掛かりが生まれてくるだろうと期待している。